

義経伝説

「判官びいき」という言葉をご存知でしょうか。弱いものを応援したくなる日本人の特質をよく表した言葉ですが、この「判官」は源九郎判官義経のことを指しています。検非違使（都の治安維持にあたる、今でいう警察のような職務）の三等官を判官といますが、義経がその任務に就いていたので「判官殿」と呼ばれていました。

義経は鎌倉幕府を開いた源頼朝の弟で、平家追討に大活躍しましたが、後に頼朝と不和になり、幕府から追われる身となります。義経一行は都を落ち、西国に向ったものの、嵐に遭って散り散りになり、文治3年（1187）義経主従は密かに北陸道伝いに奥州平泉に落ち延びます。北陸一帯には義経一行にまつわる伝説がたくさん残っています。「義経記」巻七に「（舟は寺泊に着き…）その夜の中に国上といふところに上りて、みくら町（一説にさくら町：）に宿を借り、明くれば弥彦の大明神を拝み奉りて…」と彌彦神社に参詣したと書かれています。この本は室町時代にできた英雄伝説的な色彩が濃い本なのでどこまで史実かわかりませんが、義経一行は越後一宮に参詣し、道中の無事を祈ったと語り伝えられています。



「お部屋の滝」 弥彦山中にあるたくさんの沢のひとつに滝の沢があります。その沢沿いに「お部屋の滝」とよばれる滝がありました。伝説によると、この滝は文治3年（1187）義経が奥州平泉に落ちてゆく道すがら、彌彦の社前に祈願を込め、数日滞在した折にこの滝に参籠して神助を祈願し、神楽の笛を吹いたといわれています。

しかしながら、昭和39年の新潟地震によって岩が崩れて滝の姿が変わり、さらにその後、治山治水のため砂防ダムが建設されたことで水量も減り、今では山の神の祠を残すだけになってしまいました。

「源義経公御陣扇」 彌彦神社宝物殿に源義経が奉納したと伝える「軍扇」が展示されています。慶長16年（1611）、神社が江戸幕府巡見使大久保長安に差出した書付に「古来より内陣にある品」として「源義経公御陣扇壹本但し五本骨」が載っていますので、江戸初期には義経の軍扇として神社に伝わっていたことがわかります。

「矢作の二本松」 大字矢作字釈迦堂の小丘状にある2本の老松は別名「弁慶腰掛の松」と言われ、義経・弁慶主従が奥州落ちの道すがら、この木の根方で休息したという伝説があります。「二松の由来碑」に書かれている七言詩に「廷尉」（判官の漢名）とあるのは義経のことを指し、「口聘不滅今尚語」と、今でも語り継がれていると書かれています。

以上、弥彦村には義経にまつわる3つの伝説が語り継がれています。